

テロワールを感じるワインの真髄は土壌をしっかりと耕すところにある！

ジェローム・ブレトドー

(ドメーヌ・ド・ベル・ヴュー)

生産地

ロワール河左岸、ナント市から南東へ 40 km ほど下ったセーヴル川沿いの町クリソン。セーヴル・エ・メーヌの地区の中でもヴァレに次いで「復活祭を祝うワイン」をつくることで有名なミュスカデの主要産地だ。そのクリソンの隣のこじんまりした村ジェティニエにジェローム・ブレトドーのカーヴがある。彼の所有する畑はヴァレの町からジェティニエ村の間に所々点在し、総面積 8 ha のうち 4 ha がミュスカデの畑、他はヴァン・ド・ペイ (val du Loire) の畑で、全て南向きの日照に恵まれた場所に位置している。この地域の気候は、大西洋から 100 km ほどしか離れていないため、海洋性気候の影響を受けやすい。そのため、気温は穏やかに安定しているが、他のワイン産地に比べて比較的雨が多く、毎年ベト病の心配がある。

歴史

現オーナーであるジェローム・ブレトドーは、ヴィニヨロンとは全く無縁の家系で育ったが、彼の父親が大のワイン好きということもあって、なんと！5歳の時から毎回食事の時に彼の父親からワインを味見させてもらっていたそう！彼が本格的にワインに興味を持ち始めたのは15歳の時！彼の誕生日に、父親から何気なくプレゼントされたボルドーワインの教本が彼のワイン人生に火をつけた。以来、アルバイトで貯めたお金を全て、本に掲載されているボルドーワインに注ぎ込み、独学でワインをマスターしていく。18歳の時に、ヴァレの隣村ランドローにある醸造学校で2年間醸造学を勉強し、そして卒業後、今度はナントのワイン学校で2年間栽培学を学ぶ。ナントの学校を出た1995年～2005年までヴァレにあるワイン農協（アランゴベール）で栽培醸造責任者として働く。当初から「自分のワイナリーを立ち上げる！」という確固たる目標をもっていたジェロームは、農協でサラリーマンをしながら、同時に自らのワイナリー立ち上げの準備を着々と進めていく。1996年～1997年には親の所有していた土地にVDPのブドウを植樹し、また、暇を見つけてはミュスカデ自然派ワインの大御所ジョー・ランドロンのドメーヌでスタージュをしてビオロジックの実践を積む。2005年に4haのミュスカデ畑を購入し、その年の12月からドメーヌ・ド・ベル・ヴューをスタートさせる。

生産者

現在、ジェロームは8haの畑を1人で管理している。（繁忙期は季節労働者が2～3人を雇う。）彼の所有するブドウ品種は、ミュスカデ、グロ・プラン、ソービニヨン・グリ、ピノグリ、シャルドネ、ガメイ、カベルネソービニヨン、カベルネフラン、メルロ、ピノノワールで、樹齢はVdPで7～12年。ミュスカデは20年平均、古樹のミュスカデは樹齢が50年を越える。彼にはたいへんユニークなアイデアがあって、ミュスカデ以外の品種でその土地のテロワールの特徴や可能性を引き出すという試みを10年前から続けている。4haしかないVdPの畑面積に9種類もの異なる品種を植えているのはそのため、今後も積極的に新しい品種を植えて、将来的にはミュスカデの産地でアツと驚くようなスーパーVdPワインをつくることを夢んでいる。

ちょっと一言、独り言

「僕は5歳の時から、食事中に飲む親父のワインを毎日味見させてもらっていたよ。そして、その頃からすでにワインは美味しいと思っていた！」これは私が、最初にワインに興味を持ったきっかけについてジェローム・ブレトドーに質問した時に返ってきた答えだ。「ん～さすがはフランス人！」と素直に感心してよいのかどうかは…年齢が年齢なので迷いどころだが、でも当時から本当にワインが好きだったのだろう。極めつけは、彼が15歳の時にボルドーワインに興味を持ち、以来、バイトで稼いだお金を全てボルドーワインに注ぎ込んだことだ！彼の話では、ボルドーのクリュクラスのワインのほとんどを自腹でテイastingして学んだそうだ。15歳といえば…えっまだ中学生じゃないの！！？って！こんなに若い頃からお酒に味をしめるなんてさぞかし不良少年だったのでは！？と思いきや、実際は逆で、16歳の時にはすでに自分のワイナリーを持つことを目標に決めていたような至ってまじめな青年だったようだ。若い頃から「とにかくたくさん地域のワインを知りたかった」という彼。ワインの学校に入ってから、本を読みつつ、他国のワインなども含めて貪欲にテイastingして違いを学んだそうだ。そして、ナントのワイン学校で栽培学を学んで以降、彼は、醸造学よりもむしろブドウ品種や土壌、テロワールの可能性にどんどん傾倒していくようになる。

「基本的に、ブドウの栽培できる地域であればどんな品種であれ、土壌次第では偉大なワインたり得る可能性があると思っている」。現在、ミュスカデの他にVdPで約9種類もの異なる品種を植えているのも、この考えがベースにあるようだ。彼にとって、ワインづくりで一番大切なもの、いや、興味のあるものはスバリ土壌で、「しっかりと耕された健康な畑に、しっかりとしたブドウの根が根づけば、すばらしいブドウができる。そして、すばらしいブドウからは上質のワインができる」と確信している。現に、彼のつくるVdPワインはフランス国内で全て即完売という人気ぶりで、また、近年はこのVdPを購入したクライアントがジェロームのミュスカデを初めて知り、そして、彼のミュスカデを通じてあらためてミュスカデ本来の良さを再認識し始めるという相乗効果を生んでいるそうだ！（格下げしたVdPワインが本来のAOCワイン評価を牽引するなんて…自然派ワインでは良く起こりがち！？）

当時、彼がまだ農協で働いていた時、彼はありとあらゆるミュスカデを試飲し、気になるドメーヌがあれば直接自分の足で訪問してまわった。その結果、彼の中で明らかにテロワールの違いを感じとれたワインがひとつあったそうだ。それが、以降、彼に多大な影響を与えるジョー・ランドロンのミュスカデだった。今では自然派ワインの直接の先輩にあたるジョー・ランドロンも、当時、彼に教えたことはこの「土壌を耕すこと」の大切さだった。「ジョーのワインづくりは自分の考えを一步確信に近づけた」というジェローム。彼が言うに、「このミュスカデという地域の土壌は二重構造になっていて、大陸から来る花崗岩とその下に大西洋プレートから来る片麻岩が重なり合っている。土壌がしっかりと耕され、ブドウの根が地中奥深くにあるミネラルをたっぷり含んだ片麻岩に届いた時に、初めて複雑なテロワールの個性がワインに反映される」とのことだ。確かに、彼のつくるワインは、ミュスカデにしてもVdPにしても、味わいの中になにかやさしい海のミネラルを想像させるようなある共通した個性が感じられる。この共通した個性はもちろん彼自身が一番実感していることで、また、土壌から来るテロワールの可能性を追求する彼の動機にもなっている。

「僕のミュスカデはまだまだポテンシャルを引き出せる！」と最後まで情熱的に語ってくれた若干32歳の若きビニヨン、ジェローム・ブレトドー！これからも彼は、+αのポテンシャルを引き出すためにピオディナミの導入等、貪欲に新しい方法を取り入れていこうと考えている。

たかがミュスカデ…とお思いの皆さん！彼のコストパフォーマンス高い「テロワールを感じる」ワインをとくとご賞味あれ！